鹫峰

二　月　号
第3卷　第2号
通卷　第20号

鷲峰目次　二月号

巻頭の言葉
宇宙を制する大音響……小林白峰　4

自我偈講義・第五回
久遠の本仏と人間釈尊・その五……日高白象　6

職場を通した我が使命観……花房毅　13

インドへ渡る
身延山金銅の釈尊像……日高白象　27

鷲峰教学研修座談会
真言密教との対決 …… 編集部 35
特に理と事について
信仰相談室
与同罪と謗法呵責 …… 日高白象 41
仏語解釈
煩悩即菩提 …… 44
第七回身延山青年行学講習会案内 …… 46
醒悟園本妙庵春季青年信行会案内 …… 26
鷲峰賛助会員紹介 …… 47
本誌の発行所身延へ還る …… 47
編集後記 …… 48

表紙題字 …… 身延山法主 藤井日静猊下
表紙写真 …… インド霊鷲山へ渡つた身延山金銅の釈尊像
表紙印刷 …… 大阪東洋印刷社長藤原秀憲氏寄進

制する大音響

クリシナン・インド大統領は、ネール首相没後における再建インドの指導者として、卓抜なる政治家であると共に、インド哲学の権威者でもありまし同時に世界的な音響学者でもありました。彼は青年時代、ロンドンのケンブリッヂ大学に学び、卒業後、久しく同大学で音響学の教鞭をとつていました。この間、渡英に際しては、わざ〳〵英国からインドまで、お迎えの飛行機が来ていたほどであつたということです。この一例をもつてしても彼の音響学に対する権威のほどがうかゞわれましよう。それは今年の一月のことでした。

「日は東より出でて西に入る、日本の仏法の月氏（インド）へ還るべき瑞相なり」

という日蓮大聖人の予言を体して、身延山奥之院より中天竺王舎城復興のため渡印、撃鼓宣令する日本山一門の姿を、まのあたりにしたクリシナン大統領は、感動のあまり、次のように讃えました。

「南無妙法蓮華経と唱える音声、うちならす法鼓の響き、これこそ宇宙を制する大音響である」

と。これは音響学上よりみた彼の絶讃であることは申すまでもありません。然しこれが、たゞ単なる外交辞令の如きものでないことは、この時、

を宇宙

「私は世界中のあらゆる音響を研究して来た。日本人の万歳という歓呼の声も調べてみた。然しこの音響は流れてしまつている」

と忌憚なく批評していたことによつても明かでありましよう。

インド独立の父と仰がれたマハトマ、ガンヂーが、終生お題目を唱え、法鼓をうちならしたその初めは、昭和八年のことでした。この時、ガンヂー翁にお題目を授与したのは藤井日達上人でした。時に上人四十八才、二人の間には言葉が通じませんでした。然し偉大なるガンヂー翁の魂は、ためらわず的確にお題目の心をとらえまえました。そして申しました。

「このお題目、この法鼓、そしてこの祈りこそ、インド国内のみならず世界全体の、すべての対立相剋を解決するものである」

と。この讃嘆がお世辞でなかつたことは、ガンヂー翁みずからお題目を生涯唱えつゞけたという事実と、その滅後、ガンヂー翁の令息みずから、

「父は本当にお題目を信じていました」

と述懐していたことによつて明かでありましよう。お題目、それは本仏釈尊の久遠の魂であり、げに宇宙を制する大音響、人間のすべての差別対立を融和合一せしめる平和の音響です。音響学者クリシナン大統領の、この一言こそ誠に傾聴にあたいするものがありましよう。

自我偈講義

久遠の本仏と人間釈尊・その五

釈尊と提婆達多

日高白象

7

「釈尊に提婆」

というコトワザがあります。このコトワザは、

「お釈迦さまのような尊いお方でさえも、提婆達多のような悪逆な敵をさけることは出来なかつたのであるから、まして我々凡夫は、たとえその人が、どんなに善人であつても、却つて人を憎むような敵が、現われて来るのも道理である」

と言つたような意味として用いられているものです

お釈迦さまといえば、今からおよそ二千数百年も昔のお方です。そのお〃迦さまが亡くなられて、二千数百年もたつた今日でさえも、なお、こうしたコトワザの残つているということは、釈尊に対した提婆達多の悪逆が、その当時の仏教々団のみならず、当時のインド一国の朝野をあげて、如何に衝動せしめ、震駭せしめてた出来ごとであつたかという、その激烈さと、深刻さを物語つているということが出来ましよう。

それは釈尊八十年の御生涯の中、もう晩年のことでした。釈尊の弟子となつていた提婆達多は、

△何とかして自分も、尊釈のように、多くの人々から

敬われ、慕われる程どの身になつてみたいものだ〉

と願つていました。然し、その願いはひたむきな修行によつて仏知見を開くといつた真面目なものではなくて、ともかくも世間から敬われるようになりたいという、よこしまな名利心にもとずく野望でした。この野望には、おそらく〃〃に対するネタミもあつたことでしよう。

伝えるところによれば、まだ釈尊が悉多太子であつた頃のこと、三国一の美人とうたわれたヤシユダラ姫を妃にしようとして、釈尊と提婆達多とが競いあい、その結果、提婆達多が敗れたことから、釈尊に対してネタミをいだくようになり、釈尊とヤシユダラ姫が結婚した後も、そして二人の間に嫡子ラゴラの生れた後までも、なおも執拗にヤシユダラに対する邪恋をいだき、釈尊が成道して後、ヤシユダラまでが髪を剃つて仏弟子となつてしまつて、はじめて、かなわぬ恋とあきらめ、その代り、自分も釈尊に負けない覚者になろうと決心して、仏弟子の中にもぐり込んだ、ということです。

この伝説は、事実そうであつたかどうかはともかくとしても、釈尊の晩年における提婆達多の、そのすさまじいばかりの反逆の跡を思いあわせる時、その心理的な原因を、青年時代の悲恋にまでちかのぼつて想像してみることも、敢て不可能なことではないかも知れません。

直接の原因は、動機といつてもよいでしようが、それは提婆達多が、

〈釈尊のように、いや釈尊以上に、人々から敬われ、慕われたい〉

と思う一念から釈尊の説かれた教えを、あたかも自分みずから悟つた教えであるかのように、まだその教えを聞かない多くの仏弟子たちに対して、得意然として語つていました。

或る時、このことを知られた〃〃が、提婆達多を呼びよせられて、

「人の悟つた教えを、自分で悟つた教えのように、言

いふらすことは、丁度、人の唾をくらうような愚かな行為である。改めるがよい」

と静かに訓されました。このことを経典の中では、

「汝、愚人、人の唾をくらう」

と記しています。釈尊は日頃から譬え話の非常に巧みなお方であられたのですが、「人の唾をくらう」というこの譬えは、やさしい中にも、二度と、そのあやまちを犯させないとする鋭さを秘めているものです。この一言で提婆達多の野望は、完全に封ぜられましていました。然し、

〈何とかして世間の大衆を自分の思うまゝにしたい〉

と思う提婆達多は、教えを盗むことを封ぜられた以上、今度は、

〈神通力を得たならば、……〉

と思いこみました。然し釈尊のような神通力は容易に得られるものではありません。そこで釈尊に対して

「世尊よ、世尊は三明六通の神通力をもつて、多くの人々を導き救つておられます。仏弟子たちも世尊のような、如来秘密神通之力を得たならば、さぞめし多くの人々を利益し、仏法も、より広く弘まることでしよう。

私も衆生を教化する念願に、やぶさかではありません。その故に神通力を得たいと願わずにはおられません。

世尊よ、私に神通力をお教え下さい。神通力は、どうすればたもてるものでしようか。どうすれば自由自在に使えるものでしようか。我が身に神通力のそなわる方法をお与え下さい。

と熱心に頼みました。釈尊は答えられました。

「提婆達多よ、よく聞くがよい。通神力は求むべきものではない。神通力というものは、仏道を正しく求め正しく修行した結果、おのずから備つて来るものである。仏道によらない仏通力は、寧ろ邪道に堕ち入る。求めるべきものは神通力ではなく、正しい仏道であり仏知見の道のみである。このことを能く肝に銘じておくがよい」

またしても、提婆達多の野望は封じられてしまいました。

〈かくなる上は……〉

と観念した提婆達多は、

〈今に見ておれ……〉

と秘かに仏教以外の外道の行者の所へ行き、そこで秘かに神変不可思議な現象をあらわす妖術を学びました。当時のインドには、そうした妖術をこゝする、外道の行者が多くいたのです。彼は真剣のそものでした。復讐の一念に凝結した真剣さでした。

やがて妖術を習得した提婆達多は、今こそ、多年の野望を実現しようとして、当時コーサラ国と並んでインドの強国とうたわれていた、マカダ国の王子・阿闍世に近づきました。そして王子を籠絡せんとして神変不可思議な現象を次々にあらわしてみせました。

王子は、すつかり魂を奪われてしまいました。頃はよし、提婆達多は悪魔のように、さゝやきました。

「王子よ、王子は何時まで、父王の言うなりになつているのです。父王がいなければ、天下は王子の思うがまゝです。王子よ、父王を殺して、みずから新王となりなさい。私がついています。私もまた、仏陀を殺して、みずから新仏となりましよう。新王と新仏が力をあわすれば、インドの全大陸は意のまゝになりましよう」

マカダの国王ビンビサラ大王は、深く仏教に帰依し竹林精舎の園林を寄進したり、毎日のように王舎城外の霊鷲山に登つては、熱心に釈尊の説教を聴聞していました。提婆達多にとつては、ビンビサラ大王こそ、釈尊に次ぐ野望達成の障壁であつたのです。

提婆多達の魔性に魅せられた阿闍世王子は、さつそく父なるビンビサラ大王と、母なるイダイケ夫人とをとらえて幽閉しました。この幽閉窟は、今なお王舎城跡の中に残つていますが。こゝに、歴史にもその名を留めた「王舎城の悲劇」が起つたのです。

王子は、大王をハリツケの刑に処し、残忍にも尺余の釘を、生きている大王の全身に、一本一本打ち込ん

では、生殺しに殺してしまいました。つゞいて母も、獄中に餓死させてしまいました。こうした極刑は、もとより提婆多達の入智慧であつたことは、申すまでもありません。

それはナチスドイツの残忍にも勝る、残酷な行為ですが、阿闍世が新王となるや、提婆多達は、新王側近の黒幕となつて、思う存分に暴威をふるいました。

群象に酒をのませて暴走させては、街の家々を破壊したり、逃げまどう人々を踏み殺させなりなどしました。或は秘かに仏教徒を、みずからの手で撲殺もしました。一方、表面的には、釈尊よりも粗末な衣をまとい、粗末な食物を食べてみせては、釈尊以上の戒律をたもつた、釈尊以上の仏陀であることを印象ずけしめ

「私は、新王の帰依を受けた新仏である」

と国家権勢を傘に宣伝し、甘言をもつて仏教々団の大半を引き抜いて、象頭山に集結せしめ、遂に仏教々団を破壊してしまい、一時は釈尊の側よりも、優勢であるかのようでした。

然し、それは永くはありませんでした。さすがに阿闍世王は、良心の呵責に堪えかね、釈尊のみもとにぬかずいて、前非を悔い、象頭山に集まつていた人々もおい〳〵めざめて釈尊のみもとへ帰つていきました。

たちまちのうちに提婆多達は、国王にも、民衆にも見放なされて、野望は座折してしまいました。もはや取るべき手段は、一対一、みずから体当りで釈尊を殺すほかはありませんでした。

釈尊の日課は、竹林精舎を出て、王舎城の街を通り郊外にある名医ギバの薬草園を径て、常説法の座とされた、霊鷲山の峰に登ることでした。

これに目をつけた提婆多達は、先き廻りして霊鷲山上から、仏弟子を従えて、山頂の下に通りかゝつた釈尊の、頭上めがけて巨岩を落しかけました。これがまともに当れば即死もまぬがれ得ないところです。然し巨岩は、どうしたハズミか横にそれ、釈尊の足の指をかすり、わずかに血をにじませたゞけでした。

次に、提婆達多のとつた背水の手段は、鋭くのばし

た自分の手の、十本の爪裏に猛毒をぬりつけて、通りかゝつた釈尊の足下に、我れと我が身を投げ出し、

「世尊よ、お許し下さい。私が悪うございました。懺悔いたします」

と、ひれ伏し、頭面接足帰命礼という作法の通り、仏足礼拝とみせかけて、釈尊の足を力まかせに、ひきかきました。鋭い爪です。当然、釈尊の皮膚は破れ、爪裏にかくされた猛毒は、その傷口より入つて、その場で釈尊は毒殺されたはずです。

ところが釈尊の皮膚は、巌のようでした、却つて提婆多達の生爪が裂け、そのため猛毒によつて悶死したのは、提婆多達自身であつたのでした。

提婆多達入定屈は、今なお王舎城外、多宝山麓に残つており、また釈尊の頭上に落下せしめた巨岩も、ゲンジョウ三蔵が中国よりインドへ経典を求めて、王舎城の仏跡を巡拝した折までは、霊鷲山に遺つていた、と大唐西域記の中に記されています。

以上が、釈尊に反逆した提婆多達の物語の大要ですが、仏教々団の中では、後々の世までも、提婆多達ほどの極悪人はいないと、いわれているほどです。

仏教における最大の悪逆とは、誹謗正法と五逆といわれ、大無量寿経の中でも、弥陀の四十八願の中、第十八願では「唯除五逆誹謗正法」といつて、「阿弥陀仏は、念仏を唱える者は、如何なる者でも救済するが然し仏法を誹謗した者と、五逆罪を犯した者だけは除く」と誓つているほどです。このことについては、親鸞自身独特の解釈もあるようですが、然し誹謗正法と五逆罪が、人間の罪の中でも、最も重い罪であると、仏教ではいうのです。

ところで五逆罪というのは、

一、父を殺すこと
二、母を殺すこと
三、仏弟子を殺すこと
四、釈尊を傷つけ、仏身より血を流すこと
五、仏教々団を分裂・破壊すること

という罪科ですが、これは、とりもなおさず提婆多

達の犯した罪の一つ一つにほかならないのです。

法華経が説かれるまでの仏教経典では、センダイ不成仏といつて、仏教を信じない一センダイの者は、永劫成仏することは出来ないと説くと共に、提婆多達の如き五逆・誹謗正法の者は、悉く無間堕地獄と主張して来ました。

ところが法華経に来つて、一センダイの者はもとより、提婆多達の如き極悪人でさえも、成仏することが出来る、ということを明らかにしているのです。法華経第十二章の提婆多達品がそれです。

この提婆多達品の中に悪逆無道の提婆多達に対する釈尊の、限りなき叡智と慈悲が珠玉の如く輝き、提婆悪逆の当身に、三世を通して仏身を観ぜられた釈尊の人間観が、克明に開顕されおてり、また釈尊のこの人間観を通して、

「人間釈尊こそ久遠の本仏である」

ということを反証する根拠を見出すことが出来るのです。

次に提婆多達品の内容の中から、釈尊の人間観をうかがつてみることにいたしましょう。

〈以下次号〉

今此の三界は　皆是れ我が有なり
其の中の衆生は　悉く是れ吾が子なり
而も今此の処は　もろもろの患難多し
唯我れ一人のみ　能く救護を為す

（法華経・譬喩品）

職場を通した我が使命観

花房　毅

I

僕は、神戸の甲南大学で経営理学（それは電子計算機を中心にした近代経営のための経営科学）を専攻し昭和三十九年三月、こゝを卒業、たゞいま岐阜市西野町七丁目にある後藤孵卵場に勤務しています。

在校中は、身延山青年行学講習会にも再三参加したり、身延山布教別動隊の関西街頭布教の折にも参加して、鷲峰会の方々とも親しくなり、本誌にも、これまで二度ばかり拙稿を掲載して頂いたことがありました

今度で三度目の寄稿ですが、「職場を通した我が使命観」と題して記述するに当り、まず今の会社に入社するまでのイキサツから、概略述べてみましょう。

実は、大学卒業も間近くなつた頃、僕の生涯の方針を決める三つの就職口がありました。その第一は関西財界に入る道、第二は海外へ留学し、帰朝した将来は政界へ入る道。留学には年間百五十万円の学費が支給されることになつていました。

次に第三の道は、規模の上では世界一・二位を競い東洋では名実ともに、第一位を誇る後藤孵卵場の企画に入り、世界最新の電子計算機を操作することでした

後藤孵卵場というのは、鶏の卵を孵化してヒヨコを育て、若鶏を加工して市場へ出す会社です。製品は、

国内はもとより広く海外へも輸出されていました。毎通一万個の卵を孵化する孵卵機は、大きな会社でも数十台しかないのに、こゝには三百六十六台もあり、別に十町歩からの敷地には、品種改良の研究所もあつて実習生は日本全国から、或はアジア各国からも来ており、文字通り東洋一、乃至世界一を誇る大会社でした

然し、どんなに規模は大きく、製品はアメリカを凌ぐ世界一を誇つてはいても、一口に言えばヒヨコの会社です。スマートに聞えるはずはありません。

当時、在家の身ながらも仕事を通して、世界的に法華経を宣布しよう、という大望に燃えていた僕にとつては、好ましからぬ仕事内容でした。

その上、こゝの会社は、社長の方針にもとずいて、全社をあげて「生長の家」の指導による精神修養がなされており、毎月「生長の家」の講師が来ては、熱心な伝道がなされていました。

生涯を法華経の信仰に貫ぬこうと決意していた僕がどうして、そういう会社に入るわけがありましよう。

然し、学校当局からは、

「この社会で、今度、導入されるＩＢＭ社の電子計算機は、最新式の優秀な機械で、世界中、まだ一台も市場には出ていないものだ。学校としては君を推薦したい。是非、後藤に入社して欲しい」

と頼まれる始末です。やむなくお義理で就職試験だけ受けてみました。ところが口頭試問の時、他の者は皆、せい〳〵十分間ぐらいであつたのにもかゝわらず僕だけ一時間あまりもかゝりました。

この時、

「僕は法華経を信仰しているものであるから、生長の家の会社に入る気は毛頭にもない。今日は学校の義理で、試験を受けに来たのにすぎない」

と正直に申上げ、僕の日頃の信仰の一端を述べておきました。そして、

〈このくらい言つておけば、会社も採用しないだろうし、学校としても僕を推薦したことをあきらめるだろう〉

と思つていました。

ところが、どこをどう見込まれたものか、間もなく会社から採用通知が来てしまい、却つて逆効果になつてしまいました。ホト〳〵に弱つて家族とも相談し、身延山の日高上人の御指示を仰ぐことにしました。僕としては内心、

〈海外留学が第一、第二は関西財界、第三は無し〉

という返事を、秘かに期待しないわけではありませんでした。ところが折り返して来た日高上人の手紙には、

「三つの道の中、第三の後藤の会社が一番縁の深い。縁の深い方へ行くがよい。そこが現在、若し全社をあげて、法華経信仰に固つていたのであつたならば、自分から進んでも入りたいところだろう。それならば、会社の奉じている宗教は宗教として、まず、そこへ入つて、みずからの法華経信仰をつらぬきつゝ、社長をはじめ会社全体を「生長の家」から法華経信仰へ昇華せしめて行くならば、君自身の生涯にとつても、また

と得難い修行の場となるだろう。

その功徳は大きい。もはや一個人の問題ではなく、会社全体の問題であり、会社の規模を通して、世界全体の問題となつて来る」

という、思いもかけない意見が述べられていました。全く奇想天外な抱負です。僕は驚いてしまいました。

然し、よく〳〵考えてみれば、日蓮大聖人は鎌倉幕府を相手どり、天下を向うに廻して、たゞ一人、敢然として法華経を宣布したのです。所を追われるどころか、死罪、流罪等の大小の法難は度重つていました。大聖人の門下と名乗る以上、大聖人につゞく決意を持たなくてはなりません。僕は決心しました。

〈よし、やろう！……四条金吾が主君江馬光時に宮仕えしたように、不自惜身命、心血をそゝいで会社のために戦い、その上において、日蓮大聖人が立正安国の大義のもと、日本一国を法華経の浄仏国土としようとされたように、この社会をして「生長の家」という一宗教から脱皮せしめ、「生長の家」をはじめ一切の宗

教を、包摂開会する万善同帰、万教帰一の法華経を奉ずる本化地涌の大僧伽として湧出せしめよう。法華経の色読はこゝにある。このためならば、たとえ身は粉にしてもよい。〉

〈若し、この会社が法華経に昇華したならば、規模の上からしても、アジア第一の法華一乗の会社となり、こゝへ学びに来る日本全国の農村青年も、アジア各国の留学生も、その技術と法華経信仰をもつて、それぞれ故国に帰り、物心両面から、その国、その地方の文化に貢献するだろう〉

〈この時、後藤の会社は、一産業会社であるばかりではなく、法華経広宣流布の核、世界平和の核となつている〉

僕は、この着想の素晴しさに、身ぶるいするような感動を覚えました。そして如何なる苦難があつても、大聖人の忍難慈勝の昔を偲びつゝ、初志を貫徹する決意を固めたのでした。

もはや海外へ留学するとか、帰朝後、華やかな政界に入るとか、或は関西の財界に入る、といつたような夢も吹つ飛んでしまい、ヒヨコの会社という仕事の内容に対するコダワリも、さら〳〵になく、在家の身ながらも、法華経を宣布する使命を、足下の職場に見出し、この厳しい現実をみつめ、みつめる大地が遙かなる広宣流布へつらなつていることに、すさまじいばかりの、斗志の沸き立つて来るのを、覚えずにはおられませんでした。

僕は一転しました。そして喜んで学校の推薦に感謝し、会社に採用してもらうことにしたのです。

Ⅱ

入社は三月三十一日でしたが、入社して驚きました独身の男子従業員の過半数は、会社の寮に起居し、鰥卵・鑑別部門関係者は、朝五時より就業、終業は夕方の七時、八時を過ぎてしまいました。

勤務時間の長いのは、ヒヨコという生きものをあつかつているからです。オリンピックに優勝した常勝ニ

チボー貝塚のバレーボールチームの訓練、それは終業の夕刻五時より夜半の十二時、一時にまでも及ぶこと連日という、あの厳しさには及ばないとしても、養鶏業では、世界第一・二位を競う後藤孵卵場です。世界市場を相手に連日、連夜、真剣な作業が続けられていました。

それにしても、

〈労働基準法は、どうなっているだろう〉

と不思議に思わずにはおられませんでした。

入社当時の実習期間、それはどこの会社でもそうでしょうが、専門に関係もない会社の全部内にわたる、スパルタ式教育実習が矢つぎ早やに、たゝき込まれました。

大学で電子計算機を専攻した身でありながら、その機械の前に立つこともなく、学んだ種々の経営管理手法を活用する場は与えられず、鶏の糞にまみれた作業をつゞける中、まるで白日夢を見ているような、やり切れない思いもしたことでした。

そして、法華経の立場からすれば、「生長の家」の教えの幼稚さもさることながら、わめきたくもなったのは、まだ電子計算機の導入の見通しもなく、古い会計機しかなかったことでした。

〈どうして、こんな会社に日高上人が、「緑が深い」といって、すゝめられたのか……〉

〈人間一生わずか六十五年、僕には後わずか四十余年しかないというのに……〉

〈一年、いな一カ月といえども、僕にとっては、何ものにも替え難い貴重な時間だ、というのに……〉

僕は、怒りと悲しみを込めて、日高上人へ何度も手紙を出しました。当時の僕を、慰め励ますものは、日高上人から来る手紙でした。その中には、

「私も十九才の時、神の啓示によって出家した。然し現実の宗門には、日蓮大聖人の息吹すら、何処にも見出すことは出来なかった。むしろ在家の者の方が、人生に対しても真剣であり、信仰に対しても純粋であるかのように思われてならなかった。何度、還俗しよう

か、と迷つたか判らない。その都度、神は常に言つた

＜辛抱せよ、時は必ず来る!!＞

と。それから二十有余年たつた今日、その時の神の計らいを、はじめて理解することが出来る喜びを持つようになつた。

そこで今、自分の経験をもつてしても、敢えて、この時の神の言葉を、そのまゝ、君に伝えたい。

＜辛抱せよ、時は必ず来る!!＞

と。君は、この会社に縁が深い。縁はます〳〵日々に深くなつて行く。電子計算機も必ず導入される」

といつたようなことが、したゝめられていました。

然し、毎日の激労は、僕の心身をけずるばかりでした。体重は二貫目もやせていました。それでも、

＜僕が嘲われることは、法華経が嘲われることだ。たとえ、おれは倒れても、法華経に傷をつけてはならない。大聖人の忍難にくらぶれば、何のこれしき……＞

僕は、たゞそのことだけで、歯をくいしばつて頑張り通しました。入社二ケ月目、実習期間もすぎた頃、とう〳〵倒れてしまいました。急性盲腸炎でした。手術の経過は、幸い良好でしたが、この時、健康を診断した医者が驚いて、

「甚しい疲労だ。こんな疲労のしかたでは、寿命がいくらあつても足りない」

と注意したほどでした。

■

退院静養後、再び会社へ出た時、会社の令息である専務（カリフォルニヤ大学出身）の直属に配置されました。その頃から、各部署の責任者より成るＩＢＭ委員会にも出席して、会社の機械化が検討され始めました。

また名古屋方面の、この種の研究会や講習会にも出て、たま〳〵僕が所見を発表したことから、他の会社よりスカウトの話しが、随分もち込まれるようになつて来ました。

然し僕は、どんなに好条件のスカウトも、言下に断

りつゞけました。というのは、現在こそ、最も縁の深い職場であると信ずることゝ、男児として一旦誓つた初一念を貫くためです。

入社して半年すぎる頃、連日のように名古屋へ出張し、種々の講習会やＩＢＭ関係の研究会へ出席するようになりました。

そして会社における業務も　社内ＩＢＭ委員会の協力により、どし〳〵機械化てれて行き、もはや現在のＰＣＳ機械群では、どうにもならないようなところへ来ました。いよ〳〵会社のトップも、電子計算組織の導入を考えるべき段階となつて来ました。

そこへもつて来て、ＩＢＭ社がシステム三六〇グループ二〇という新機種を開発し、会社としても、いよいよその導入実現の見通しを立てることになりましたやつと序ノ口にたどりつくことが出来たのです。

然し、まだ〳〵多くの問題が残つています。社内各部門にわたつて、ＱＣ、ＩＥ、ＯＲ、ＣＣ、ＳＥ、ＭＡＰＩ、ＶＡ等々、種々の経営管理手法を確立し、そのプロセスを電子計算組織で行う、システム体系を完成しなければならないのです。

Ⅳ

そうした頃、そうです、それは九月二十八日のことでした。マレーシヤから二人の外人が、会社へ研修のためにやつて来ました。

その後、ひきつゞいてインドとインドネシヤから一人ずつ外人がやつて来ましたが、彼等によつて、海外における日本というものを、たゝきのめされるような思いで聞かされました。

日本人は誰しも、アジアにおいては日本国が、第一流の国であることを信じて疑いません。然し、そうではありませんでした。日本の輸出品を例にとつてみましても、日本の製品は、国内よりも外地における方がはるかに安いという状態なのです。これなら商品が売れて当り前の話しです。電気製品のＰＲには、すごい輸出の話しが必ず出ていますが、現実は、おそろしい

性どのコストダウンで出廻つているのです。

そして東南アジアの人々が、日本に対して抱いている感情……それは、おそろしいばかりでした。

終戦後、半年もたつてから、会う人々の両腕を斬り落し、多くの人々の両眼をくりぬき、顔をスダレのように切りきざんで行つた軍部の話し……ほんの一例を挙げるだけでも、日本人は、決してナチスドイツの残虐行為を口にすることは出来ません。

彼等は申しました。

「原爆を日本に落したことは、今でこそ、とやかく批判されてはいるが、然し戦争中、あのギリ〳〵にひつ迫していた時局では、やむを得なかつたのだ。

もはや勝てない、と判つていながら日本は、何故、もつと早く降伏しなかつたのか……現在の悲劇は起らなかつたろうに。

大和魂があるならば、何故、真に日本の前途を考えなかつたのか。大和魂を結集して、真の日本国、真の指導国に生れかわる方向へ邁進しなかつたのか……。殺されてしまつたのなら、まだいゝ。終戦後、半年もたつてから、両腕を斬り落され、両眼をくりぬかれた数多くの我々の同胞は、一生を どうやつて暮して行けばいいのだ……。大和魂とは、ヤケクソという意味なのか」

こんなことを言つたのは、マレーシヤから来たフアン・ウイン・チヨンという二十五才の青年でした。彼とは、すごく気が合い、よく色々なことを語りあいました。

会社の寮では、外人が入社して来ると、緑があるのか、みんな僕の部屋へやつて来ます。そして、それらの多くの外人たちによつて、外国から見た日本国というものが、少しずつ判りかけて来ました。

僕は、そのたびに両手をついて、あやまつていました。何時も涙がボロ〳〵出て来ますが彼等は驚いて、「君が、あやまることはないんだ。そんなつもりで言つたのぢあない。つい言い方が激しくなつて、ごめんね。戦争だつたんだ。みんなおかしくなつてたんだ」

と言つてくれます。そんな時、何時も、

「然し僕は、日本人だ。俺は日本人なんだ」

という言葉が出て来ます。

戦争！……それは僕たちが経験したこともない地上最大の悪夢であり、まさに地獄そのものでした。同じ人間同志が憎しみあい、殺しあい、永い永い間、人類が一致協力して一歩一歩、築きあげて来たものを、同じ人類の手によつて、一挙に破滅し去つて行つたのです。

心の中では、誰もかれもが、平和を願いつゝ、これこそ真の平和の道であると信じつゝ、そう信じる者同志が、祖先の心血をそゝいだ美しき結晶を、みずから踏みつぶして行つたのです。何というはかないことなのでしょう。かくも素晴しき人間に、かくも愚かなはかない面があろうとは……。

僕たちの進むべき道は、一つしかありません。真の真の平和への道を歩みつゝ、過去の僕たちの祖先や先輩が犯した罪を、一人一人が背負つて行かねばなりません。

如何に悪夢の中にあつたにせよ、如何に素晴しい歴史を築きあげたにせよ、犯した罪は、消えはしないのです。

しかも悪夢は、単なる夢にはあらずして、そのために今もなお、日本国民の中にも、かの国民の中にも、多くの人々が堪え苦しみぬいているのです。

V

インドからやつて来たブイ・テイ・コーシーという人、彼は熱烈なキリスト教の牧師ですが、また素晴しい人でした。

こゝ数年間、インドは農作物が殆ど全滅の状態で多くの人々が餓死して行つたそうです。彼は、救われようもない苦しむ多くの人々の上に、神のめぐみを祈りました。祈るほかに何のてだてもなかつたのです。

炎天に焼けたゞれた荒涼たる大地に、ひれふして慟哭しましたた。そして、すりつけた涙の顔をあげた時

その眼前に神の姿を見たというのです。更に神の言葉を聞いたというのです。それは、打ち続く作凶のため餓死して行く多くの農民を救わんとする神の啓示でした。電光のきらめき渡るが如く、天降つた神の啓示…彼は奮い立ちました。

〈そうだ、養鶏の道こそ、インドの農民を救い、国民を救う道であつたのだ〉

〈然しインドの農民は、養鶏について何一つとして知つてはいない。よし　私がやろう。私が養鶏の技術を習得して、農民に教えよう〉

彼は牧師の身でありながら、それまで貯えていた僅かなものを、すべて投じて、はるばる後藤孵卵場へ渡つて来たのです。

毎夜、彼と話しあうのは、何時もキリスト教と法華経の対決でした。然し僕は、彼の類なき、我が仏陀が悉多太子であつた時も、かくやとばかりわ思れる　そのノーブルな顔立ちと、その崇高な心情に、もはや一言も出ませんでした。僕は、心の底から、たたきのめされた思いをしました。

彼の光り輝く、絶世の美人も、かくはあらじ、と思われる澄み切つた瞳に見つめられ、その深い祈りに触れる時、僕は、自分が次第〳〵に小さくしんぼで行くのを、どうすることも出来なかつたのです。

小さくしぼんだ僕は、然し心の中で、こうつぶやいていました。

〈あなたは、何と素晴しい人なんだ……。そのあなたが説く、キリスト教の教えも、本当に素晴しい。キリスト教の神を信じているからこそ、そして、その実在を確信しているからこそ、あなたは不動の信念をもち何時も澄み切つた、光り輝く瞳をもつている〉

〈何にもまして素晴しいのは。あなたの、そのギリギリのところで、始めて得た、切ないばかりの祈り……自分一人の身は、どうなろうとも、自分一人苦しむことによつて、インドの農民の上に、幸せがおとずれるのであるならば、それが最高の生き甲斐と、あなたはつぶやいた……〉

〈然し……然し……今の僕自身の人徳は、遠くあなたに及ばなくても、説く教えは、やつぱり僕の方が正しいんです。僕のたもつている法華経の教えの方が、あなたのたもつているキリスト教の教えよりも、はるかに〈にすぐれているのです。やがてインドへ、あなたが帰国されるまでには、きつと、そのことが判るようになつて来ますよ……きつと、かならず……〉

VI

僕は、後藤孵卵場の一新入社員にすぎませんが、後藤のヒヨコは、まさしく日本の代表です。そして世界超一流だ、とばかり思い込んでいました。事実そうなのですが、然し最近、油断出来しくなつて来たのです

今、外国ビナが、どし〈日本に流れ込んでおり、中には元農林省の高官が、その代理店をやつているほどです。それば、まさに素晴しいヒヨコですが、第一回の外国ビナの攻勢は、CRDという病気によつて、失敗に帰しました。

然し。その後の状態では、外国ビナは、おそるべき優秀性を発揮し始めました。そして事実、東南アジアにおけるヒナの地位も、後藤ビナに迫つているという話しです。

国内においても、強大なる資本の、そして、素晴しい能力をもつた外国ビナが、更には元農林省の高官の手によつて、ひるがつております。

このまゝで行けば、今に日本の養鶏業は、外国ビナによつて危機に追い込まれないとは限りません。今や日本を代表する後藤孵卵場が立ちあがらない限り、もはや何の手もないのです。

幸い後藤の会社には、日本における鶏育種改良部門では、第一人者とうたわれた山田行雄博士や、社長の二男である後藤悦男中央研究所長、生理部門には元九大教授荒牧博士、病理者門には牧田博士というスタッフで、育種改良を進めておりますが、その資料分析には、フオートラン系の科学技術計算用プログラムを完成せねばなりません。

現在の日本養鶏業の、この重大時期に、一刻の猶予も与えられないのです。後藤立たずば、日本養鶏業はそして引いては日本農業経済は、外国に植民地化されてしまうのです。

僕は、たゞ〳〵たゞ〳〵日本養鶏業のために戦いたい。後藤の会社で粉骨砕身してゞも、日本農業経済のために、お役に立ちたいと願うばかりです。

VII

以上が、昨年の四月入社してより十カ月間にわたる僕の心境の経過ですが、社会も知らない鼻たれの小僧の学生から、入社実習期の苦難を経て、今や養鶏業を通して、日本経済のために働く、使命を痛感するようになつたのでした。

この間、社長以下全従業員の先祖の菩提をともらうため、また社長の一念、正法帰依と罪障懺悔のため、更には殺さねばならない何万、何億というヒナや若鶏の霊を供養するため、何千枚というお題目を写経しては、故郷の母へ送り。母の手によつて故郷の河に、施餓鬼供養として流してもらつていました。

そうした或る日のことです。輸出部門の一老人が、

「これを君にあげよう」

といつて、見事に写経した一部八巻の、法華経の経巻をくれました。思いもかけない賜きものです。僕は「生長の家」を信仰している会社で、しかも社内の先輩から、みずから写経した法華経の経巻を戴こうとは夢にも思つてはいませんでした。まさしく仏天よりたまわつた法華経でした。

折も折、親友であつたマレーシヤのフアン・ウイン・チヨン君が故国へ帰ることになりました。そこで彼のために、そして引いてはマレーシヤの国の立正安国のために、戴いた法華経八巻の中の、二巻を贈ることにしました。彼は小躍りして喜びました。そして申しました。

「このお経は、私の生涯の家宝にする。私は良い日本人を友達にもつことが出来て、こんなに嬉しいことは

ない。日本の軍隊によつて残虐な目にあつた故国の同胞にも、このことを伝えたい」

残りの六巻は、僕の故郷の父母へ贈りました。さつそく父母から、

「誠に意義深い経巻であるから、家に安置しておいては、いかにも、もつたない。欠けた分は幾月かゝつても真心こめて写経し、八巻にそれえて日高上人のおられる身延の、醒悟園本妙庵の霊跡にお納めしたい」

という手紙が来ました。父母は斎戒沐浴して、残りを写経することでしよう。この旨を聞れた日高上人の方からも、ほどなく、

「その経巻は、小さくとも本妙庵に宝塔を建てゝ御安置申上げたいと思う」

という知らせがありました。東南アジアと結ぶ身延の経巻供養の宝塔、その建立も決して遠いことではないでしよう。

Ⅵ

僕は、この世が通一仏土となるまで、僕は僕に与えられた環境の中で、僕の使命を全うして行きます。人間一生の短い時を、ゴウゴウとして生命の炎を燃え沸らせながら、法のため、世のため、人のために生きぬくことが出来るならば、これほどの幸せはありません

今も日高上人の、凛いお題目の声が聞えて来るようです。僕は何処にいても、たとえ一人切りであつても大地をふみしめ、如何なる苦難にも、ニヤリツとしながら進んで参ります。

「だが、明日は必ず来る！……」

そうつぶやきながら……。

Ⅶ

僕の頭の中には　静かな、然し燃え沸るような日高上人の言葉が、何時も新しく、よみがえつて参ります

「信仰の肝心とは形ではない。教義のみのものでもない。一妙無象、蘇生万象、唱題の一念心によつて、本仏釈尊の厳然として生きてまします久遠の仏界そのも

のゝ中に入るか、入らぬか、ということにある。

本仏釈尊の仏界とは、背定、背定、絶対背定の世界そこに、生きとし生ける、在りとしあらゆる、すべてのものゝ生成と創造がある」

「ひとたび、こうした仏界に入つた者は、必ず天上にサン然として輝く不滅の光りを見る。天上の光り、この妙法蓮華経の五字の光明に照された者は如何なる苦難にあおうとも、二度と、この光りより抜け出すことの出来ない尊厳に打たれ、本仏釈尊の足下に、ひれふさずにはおられない。そして苦しむ民衆の中に、みずから身命を投じ、一人でも多くの民衆に、この如来大悲門の、久遠の光明を伝えずにおられない」

〈完〉

筆者・花房毅（はなぶさたけし）君の住所は、

岐阜市西野町七丁目

後藤孵卵場

醒悟園本妙庵

春季青年信行会

身延山青年行学講習会開催にさきだち、醒悟園本妙庵において春季青年信行会を開催いたします

一、時　三月二十三日（火）正午より、二十五日（木）午後十時まで三泊三日。

一、所　身延駅よりバスで波木井橋下車またはハイヤー（一三〇円程度）で波木井三区西平の遠藤喜男方下車、これより登詣八丁本妙庵内

一、申込　ハガキにて研修に対する希望並に質問事項など記入の上、本妙庵内・青年信行会あて。

一、会費　不要（宿泊の用意あり）

鷲峰会

霊鷲山と身延山

身延山金銅の釈尊像インド王舎城へ渡る

日高白象

釈尊像身延を出発

既に、本誌の表紙写真でおなじみの身延山金銅の釈尊像……この仏像は、今からおよそ三千年の昔、中インドの王舎城外、霊鷲山において釈尊が、法華経を説法されておられる時、七宝荘厳の多宝仏塔が涌現したという多宝山頂に、近く建立される王舎城仏舎利塔の正面本尊として鋳造され、かねて身延山祖師堂棲神閣の横の本師堂（本師釈迦牟尼仏堂）の内陣奥深く安置され、身延山法主猊下をはじめ、山内の衆僧、並に全国より身延山に参拝した多くの日蓮門下僧俗によって朝夕、法味が捧げられていましたが、いよ〳〵時機到来し、現地における王舎城仏舎利塔建立の気運も熟しその建立定礎式が本年三月六日、クリシナン・インド大統領をはじめとして、インド政界、財界をあげて各界のインド指導者が一堂に会し、盛大に挙行されようとする、この歴史的大仏事に際し、インド側の熱烈なる要望にこたえて身延山を出発、海をこえて、遠く西天インドへと渡つて行きました。それは去る一月二十二日、金曜日の午後二時のことでした。折あしく法主猊下は、東京の帝国ホテルにおける会合に出席されておられたため、代つて身延山総務望月日雄上人が大導

師となり、山内各部長をはじめ山務役職僧、身延山大学高校の学生僧までも総出仕し、また昨夜来、出迎えに来ていた此の仏像の鋳造願主である身延山大本願人（東京三徳社長）堀内貞良氏をはじめ三徳の社員も列席、身延全山をあげて荘厳なる奉送の大法要が盛大にいとなまれました。

幸い、この日は晴天に恵まれ、あくまでも澄み切つた蒼空には西の方、大聖人みずから「鉄門に似たり」と仰せられた、七面山の大ガレが、白一色の雪におゝわれて、ます〳〵無気味なほどの神秘性をたゝえつゝまぶしいほどの白銀に輝いており、本師堂の前の、庭の老木の梢には、早咲きの梅の花が、馥郁として香つていました。

法要後、再び日本へ帰つて来ることもない此の仏像の前で、幾種類もの最後の記念写真がとり終るや、仏像は厳重に荷造りされ、午後四時三十分、出迎えの三徳のトラックで、ひとまず山門前へ運び降され、翌二十三日の早朝六時、撃鼓唱題に見送られて身延山を出発、午前十一時三十分には横浜港のヂヤパンエキスプレスに到着し、インド大使館の斡旋により税関を無税で通過、三井船舶の奈良山丸に積み込まれました。

奈良山丸が横浜港を出航したのは二月一日の事でしたが、この船がインドのカルカツタに着くのは二月二十五日。こゝで仏像は再びトラツクにうつされ、一日半の行程をつゝ走つて王舎城に着き、城外の竹林精舎旧跡内に、暫定的に設けられた奉安殿に安置され、三月六日の定礎式の折に除幕、仏舎利塔の完成するまで日本仏教大僧侶、日蓮宗総本山身延山より寄贈された身延山伝来の金銅の尊釈像として、広くインド朝野の民衆に礼拝せしめることとなつているのです。

王舎城の現状

王舎城とは、初期仏教典の中でも、

「五つの山にかこまれた古い都」

と記されているように釈尊在世当時より阿闍王朝にかけて、インドの歴史上、最も繁栄した古い文化の都

でした。

この都をとりかこむ五つの山とは、霊鷲山・多宝山放広山・黄金山・興起山のことですが、霊鷲山とは釈尊が、法華経をはじめ多くの大乗経典を説法された山であり、第一峰・第二峰・第三峰という三つの峰に分れ、その第一峰の頂上は、地表およそ百八十メートル釈尊説法の宝座のあつた所。第三峰は地表およそ二百五十メートル釈尊の滅後、阿闍世王によつて仏舎利塔の建立された所です。

この霊鷲山に隣接した多宝山というのは、地表およそ三百メートル、五山の中で最も高く、その名も示す通り、霊鷲山の第一峰にあつて釈尊が、法華経を説法されている時、七宝荘厳の多宝仏塔の涌現したといわれている霊山です。

放広山とは、大放広荘厳経などの経典の説かれた所その麓に釈尊が最初に建立された竹林精舎の跡が残つています。興起山というのは、太陽の昇る山という意味であり、黄金山というのは、興起山に昇る太陽に照り映えて、黄金の如く輝くところから、そういう名のつけられた山でありましよう。

曽つて王舎城は、こうした五つの山々にかこまれた堅牢なお城であり、また風光明媚な都でした。インド中の文化は、こゝに集つて史上、稀にみるケンランさを誇つていたのです。

ところが王舎城も仏教の衰滅と共に荒廃し、幾世紀も廃墟のまゝ風雨にさらされて来ました。霊鷲山第三峰の仏舎利塔は、あとかたもなくとりこわされ、第一峰の釈尊説法宝座は、礎石をとゞめるのみであり、マガダの国王ビンビサーラ大王が説法聴聞のため、麓より登つた参道でさえ見る影もなく、その途中にある下乗塔趾と退凡塔趾が、わずかに参道の昔を偲ばせているにすぎません。

竹林精舎の跡はいうまでもなく、王舎城跡は文化財保護のため国有地となり、周辺には一軒の人家もなく遺跡は密林におゝわれ、今なお虎が出没する程ど荒廃し切つていたのです。

「根深ければ枝繁し、源遠ければ流れ長し」

とは天地の真理をうがつた日蓮大聖人のお言葉ですが、釈尊が法華経を説法された霊鷲山が荒廃していて仏教の栄えるはずはありません。また祖先の栄えた古い都が廃墟となつていて、インド国家の栄えるはずはありません。

むべなるかな、マハトマ・ガンヂー翁と共に戦つたインド独立の斗士の合言葉、

「阿育王の時代に還れ」

ということであつたそうです。

王舎城の復興

王舎城の復興を悲願して、その第一歩を印したのはインド政府でもなければ、インド民間の先覚者でもなく、日本の一人の仏教徒でした。

その人は、熊本県阿蘇に生れ、大分県臼杵の日蓮宗法音寺で出家し、立正大学の前身である日蓮宗大学を第一期生として卒業した藤井日達上人でした。

上人は昭和五年八月二十五日、身延山頂奥之院を起点として、単身法鼓をうつて西デインド開教へと旅立つて行きました。それは、

「日は東より出て西に入る、日本の仏法の月氏（インド）へ還るべき瑞相なり」

と仰せられた大聖人の、諫暁八幡鈔の結文における予言を、遺嘱として体した決死行であり、生きては再び日本の土をふまないほどの誓願にもとずくものであたのです。

爾来三十有余年、王舎城外、霊鷲山頂に立つた撃鼓唱題の祈りがつゞきました。祈りは遂に天を動かし、人を動かしました。

仏誕二千五百年祭に際し、ネール首相の肝の入りで竹林精舎の遺跡が整備され、高級ホテルが建ち、王舎城内には舗装された高速道路が貫通しました。

昭和三十七年の夏、太平洋上ビキニ島周辺に於てアメリカの水爆実験が再開されんとする時、インドの首都ニューデリーにおいて核実験反対世界平和大会が開

かれた、その時、日本を代表して出席した藤井日達上人の提唱によつて、ネール首相を委員長とする王舎城復興委員会が設立し、インドの政界・財界・建築工芸界等の、あらゆる層の代表指導者が網羅されました。藤井上人は総監・総指揮の大任を依嘱されました。

復興計画は、前後二ケ年にわたつて検討されましたそして霊鷲山を中心として王舎城と五山をふくむ周辺を、世界平和の源泉地として、公園化する案が着々として進められました。

まず多宝塔が涌現したという多宝山には、世界第一の仏舎利塔を建立し、これに登るには霊山虚空会の時釈尊が神通力をもつて、大衆を地上より虚空へ引きあげたという故事を偲ばしめるよう、ロープウエイを架設し、仏殿は霊鷲山の東二峰に、僧院は第一峰に、そしてその山麓には、ガンヂス河より運河で水を引いた大人造湖を造り、その湖畔には、法華経精神を中心とした王舎城仏教大学と、その図書館、並に各国留学僧の学生寮、竹林精舎には、古来温泉が噴水しているところから大温泉境を造る、等々という計画でした。

この時、日本では身延山大本願人堀内貞良氏が、王舎城仏舎利塔の正面本尊として、古来身延山に安置されていた三光堂の釈尊像を原型として、寸分も違わぬ金銅の釈尊像を鋳造し、身延山に奉納されたのです。

昭和三十九年二月二十五日多宝山にかけるロープウエイ工事の鍬入式が行われました。同年十二月二十六日、藤井上人は弟子をしたがえてインドへ渡りました

本年一月四日、王舎城において復興委員会が開かれ三月六日、クリシナン・インド大統領をはじめインドの代表的指導者列席のもと、仏舎利塔定礎式を挙行することが決議されました。そして、この定礎式をめざして復興作業は、めまぐるしいほど進展して行つたのです。

まず多宝山の岩をくだいて道を造り、山頂に小宝塔を建て、竹林精舎のホテルより電気を引く。このため一日一人四斗の水を、六人がかりで二石四斗、それを麓より三百メートルの山頂へ運び上げる。セメント・

砂の人夫が六人、左官が二人。人々は藤井上人をはじめ山頂に小屋をかけて起居しました。

作業は困難をきわめました。然し人々は、仏滅後未曽有の大仏事の、まさに起らんとして精根のかぎりを尽しました。

一方、日本国へは、身延山金銅の釈尊像を一日も早く王舎城へ送るよう、また温泉を掘るボーリング機械や、ロープウエイの機材を送るよう、頻繁に連絡されました。

ちなみに、王舎城より送られてまいりました藤井上人の、インド通信の一端を次に紹介してみましょう。　（　）は筆者の註。

南無妙法蓮華経　　王舎城　　日達

護賀昭和四十年太歳乙巳正月元旦

旧蠟（十二月）二十六日西天の甲市（カルカッタ）空港に着陸。同三十日、当山（王舎城日本山妙法寺……竹林精舎の横、阿難尊者のお墓のある所）に帰り、三十一日、人跡絶えたる多宝山上の御仏舎利塔（仮の小宝塔）の御宝前に、大太鼓を運び上げ、徹夜撃鼓賞令して、元旦の初日の出を拝みました。

去年は丸山師（藤井上人の弟子第一人者）と両名でしたが、今年は日本山一門のほか、総勢十五名で盛大に、新年を祝禱いたしました。

四日は王舎城迎賓館（竹林精舎跡に新設された高級ホテル）に、中央より奉賛会長、前駐日大使ビハール州首相、同農相等、県知事、奉賛会書記その他多数会合して王舎城開発会議が開かれました。

最初に、竹林精舎復興計画敷地は二十七エーカ約二十一町歩、資金二百万ルピイ、邦貨二十五億円にて立案されました。

まず拙子の意見を求められましたから、愚案を申し述べました。会議はこれを採用しました。

竹林精舎趾は、古来五十人の私有地であつたのを、仏誕二千五百年祭に政府が買収して、現在は浴地を中心に公園化しております。

竹林精舎の名にちなんで、竹を十数種類、植えつけてあり、そのほか宝樹多花果の施設がされてあります。

然しながら元来、如来世尊最初の大伽藍の建立された地でもあり、身子（舎利弗）、目連得度授戒の地でもありますから、たゞの花園ではすませぬ。

竹林精舎の隣接地が温泉浴地にして、イダイケ夫人（ビンビサーラ大王の妃）をはじめ宮中の者の沐浴せし処、僧衆の沐浴せし処でありますからこの竹林精舎趾にボーリングを下して大温泉浴地を造り、民衆極楽の地として大仏殿を建て、一般の参拝に便すべき由を立案いたしました。

現在、浴池畔に立像の釈尊石像を建てゝ祀つてあります。そこで竹林精舎開発の為にも、身延山寄贈の仏像を、一日も早く此処に仮奉安し、多宝山頂に大仏舎利塔が落成するまで、庶民に結縁せしめ度き由、インド側より申出られました。

さて多宝山の宝塔定礎式は、来る三月六日大統領を迎えて盛大に挙行することに決定し、それまでに多宝山と霊鷲山に道路の開通、電気・水道等の設備を、ビハール州政府の首相、及び県知事が引き受けました。

多宝山上の小宝塔は、日本山独力にて建立いたしました。更に大宝塔も、日本山が主力となつて建立し、西天開教の本旨を、永久に歴史に留むべき由、一門の人々に申しおります。西天の人々のみずならず、世界の人々の眼を開かしむる所以であります。

この仏事は、如来在世八ケ年の中間、見宝塔品に涌現せし多宝塔已来の大仏事であります。如来の誓願空しからずば、我等が如説修行の処に、いかでか宝塔涌現し給わざるべき。

それは金銭の問題でもなければ、人材の問題でもありませぬ。たゞ我等の「日本の仏法、月氏へ還るべき瑞相」として、如来の誓願、高祖の未来記が、末法に実現するのみであります。我等がためには、無作の仏事であります。

日本内地に百基の仏舎利塔を建つるよりも、霊山多宝山上に、この一基の宝塔を涌現せしめることが、如何に重大なる日本国の仏法の使命でありましょう。

如来の付嘱を受けたる者のみが、よく此の大仏事を成就せしめることが出来ましょう。

身延山寄贈の御尊像は、一日早ければ一日の利益であります。若し、正月の便船に乗せなければ定礎式には間に合いませぬ。

貴師、御尊像に随身して、この状の着き次第、便船を求めて渡天絵うべし。

法主猊下をはじめ一山の長老には、貴師より、御披露せられたし。

日夜早々の間、空前の大仏事の、
まさに起らんとするに際して

日高白象師

本記に関して、本誌の昭和三十九年（第二巻・第一号）正月号十四頁に、王舎城と五大山の現状略図がありますので御参照下さい。

次号はインドへ渡つた身延山金銅の釈尊像の由来について御紹介いたします

鷲峰教学研修座談会

真言密教との対決

―特に理と事について―

編集部

本年年頭、正月八日より十一日まで三泊四日間、身延町波木井山頂にある醒悟園本妙庵において、第二回鷲峰教学研修会が開かれました。

例年の通りならば、今年の冬休み中も、地方街頭布教へ長駆するはずであつたのですが、画期的な飛躍をとげねばならない今年一年に深く期するところがあり、このため敢て恒例の地方街頭布教もとりやめて、内観的な教学研修に没頭したのです。

テキストとしては、東大教授宇井伯寿博士の「仏教哲学の根本問題」という書物が使用されました。そして三泊四日間、雪と寒風にとざされた波木井山頂、ただ一軒たたずむ本妙庵道場にこもつて日高上人を中心に、一七七頁からなる此の書物を全部輪読批判しあつたのです。

研修の中心は、何といつても、「理と事」という大問題でした。批判は沸騰しました。ケン〳〵ゴウ〳〵たるものでした。それは求道と弘法の意気にもゆる青年学生

僧十二、三名の、真剣白刃をかわるすが如き、白熱化した討論の明け暮れでした。

今テキストの中の、「理と事」に関する討論の一端を紹介してみましょう。

テキストの根底思想から

和田　日蓮教学は、ただそれだけを勉強していたのでは、井戸の中の蛙で、真価が判らない。仏教各宗各派やキリスト教などの教学、或は一般哲学と比較対照して、初めて日蓮大聖人の教学、法華経の教義の素晴しさが認識される。

木村　「十方仏土の中には、ただ一乗の法のみありて、二もなく、また三もなし」と断言された法華経の特優性は、他の一切の宗教を包摂々取した上に立つたものであることを忘れてはならない。

石川　これまでの日蓮宗では、他の宗教の教学と比較対照する中に日蓮教学の素晴しさを認識するという努力に欠けるところが少くなかつた。

和田　そんなことでは、法華経弘通だの、他宗を開顕折伏するといつたようなことに対する使命観は湧いては来ない。

木村　その点、今度の研修会は、大いに意義があつたと思う。

石川　斗志が満々と湧いて来たからネ（笑）

小林　宇井伯寿といえば、仏教学の世界的な権威者と思つていたのだが、今度この本をテキストに使つてみて、何だか、がつかりしてしまつた。

なるほど彼は、世界的な仏教学者であつたかも知れない。その権威は、亡くなつた今日なお、失われていないのも事実だ。

然し、彼自身としての信仰は、なかつたのぢあないかしら。テキストを輪読してみて、特に、そういう筋が感ぜられる。

武内　博士は何宗だつたのですか

小田　禅宗ぢあなかつたのか。

小林　そのくせ、このテキストの中では、真言思想を絶讃している大聖人が「真言亡国」と破折した思想をだヨ。

石川　それはネ、通仏教的な立場

で書いたからだヨ、この本を。その方が、本もよく売れる（笑）

和田　それにしても大聖人のすぐれた教義については、少しもふれてはいない。

小田　判らなかつたからダロウヨ

川島　大聖人の教義は、本仏釈尊から法華経を付嘱されたという地涌の菩薩の自覚に到達しなければとうてい判ろうはずがない。

石川　宇井伯寿も鷲峰会のサムライにか、つちあカタなしだ（笑）

小林　カタも何も、真言思想を鑽えるようちあ、仏教破壊のそしりをまぬがれない。

真言はもと〳〵仏教ちあない。バラモンなんだ。そして仏教のカクレミノを着て、仏教を内部より潰滅しようとして来たんだ。

仏教はインドでは滅亡した。中国では複雑怪奇となつた。日本では枝葉末節に走つた。その根本原因は、殆ど密教思想によつている大聖人も、

「獅子身中の虫」と真言を呵責されたちあないか。

然し、その日蓮門下の大半も、今では殆ど、真言の毒牙におかされている。創価学会の如きは、法華経のカクレミノをかぶつた完全な真言体系だ。

藤原　テキストの六十頁から六十一頁にかけて、

「真言はインドに起り、中国では天台教学を基調として発達し、日本では華厳教学を本として更に飛躍し、弘法大師によつて始めて独立した一宗派をして成立した。

だから宗派としては、インドにも中国にも存在しなかつた。こゝに日本仏教の特色がある」

と、真言発展の歴史的経過を紹介した後、

「古来、三国にわたつて論究されて来た、理と事の関係論は、日本真言によつて、はじめて究極点に到達した」

と讃えているが、こゝだね、我々のカンにさわるところは……。

石川　だから大聖人が、

「真言は法華経の一念三千を盗んだ大ドロボウだ」

と言われたのだろう。

川島　天台教学を盗み、華厳教学

を盗んで体系ずけられた真言教学その言うところの理と事の関係論は、果して真実のものだろうか。

佐々木　伝教大師の滅後、天台教学は真言化されて、中古天台と言はれるようになつたのだが、テキストの六十四頁から六十五頁にかけては、真言化されてしまつた中古天台の、「我々人間が、そのまま仏である。我々の外に仏があるのではない」「煩悩即菩提、貪欲瞋恚即菩提ネ槃という本門本覚の仏とは、実は我々のことである」

といつたような観心ズワリの己身本尊的な本覚思想を紹介して、「これ、我々の実際生活に最高価値を認めたもので、人格尊重主義を標榜し、きわめて自由大胆に、観念的、思弁的よりも事実的、実証的な説をなすものである」

と称讃しているが、これちあ法華経寿量品の、久遠の本仏釈尊でさえも、扶殺されてしまつている小田　まるで下剋上だ。

木村　精神界の下剋上は、そのまゝ現象界の下剋上となつて現われる。真言亡国といわれるわけだ。

小林　日本の歴史は、朝野をあげて真言密教に毒されている。

宮下　真言密教は我欲追求の一点張りだ。その時その時の自分さえよければよい。たとえ邪悪なことでも折り通す。そのイン卑、陰険さは、すさまじいばかりだ。

佐々木　真言を折伏しない限り、家庭の平和も、国家の成仏も成り立たない。

近藤　いくら事々無碍の法門、即身是仏、娑婆即寂光といつても、貪瞋痴の三毒を、そのまゝ菩提といつたり、ネ槃といつたり、凡夫の外に仏はないと言つては、もはや仏教ちあないよ。

藤原　言葉は如何に巧みであつても、迷つたり、わめいたり、人生苦、社会の重圧にもたえているのが、現実の人間の姿なんだ。

川島　そこでテキストの六十五頁にも、

「本覚思想は、他方においては自然主義となつて、宗教の修行努力を軽んずる弊がともなうから、その点には一種の危険性が含まれている」

といつて、

「これらの点について反省的に、穏健な態度に還つて、発展したのが鎌倉時代の新仏教である」

と述べているが、然し仏滅後の理と事の関係論を、究極点にまで到達せしめたという真言の事の法門を、もつと徹底的に分析究明すべきであろう。

これをやらない限り、日本仏教の再建はありえない。まして大聖人滅後数百年来、真言の毒牙におかされて来た日蓮門下の、蘇生の道はない。

日蓮宗内の真言思想

木村　現在、日蓮宗の中でも、日蓮教学の確立が、やかましく論ぜられているが、真言の事の法門の根底を、破折するだけのものでなければ、その運動も的はずれになつてしまう。

和田　創価学会が教団の野望のために政界へ進出し、その結果、国を亡ぼそうとしているのも、もとをただせば真言の、悪鬼悪霊に魅せなれた所業にほかならない。

石川　創価学会も真言も、同じ穴のムジナだ（笑）

小林　然し日蓮宗の中にも、そのムジナが侵入して来ている。たとえば、大聖人滅後、程もなく、真言化した中古天台思想が、濁流の如く、トウ〳〵として侵入して来た。そして日蓮大聖人の言葉を盗んで御遺文を偽作した。

それらの偽作遺文はボウ大な数にのぼつた。もちろんその思想は真言の思想そのものだつた。

後世、日蓮門下の者は、それらを偽作と見きわめることが出来なかつた。こうして玉石混合した御遺文集が編集され、その上に立つて、近代日蓮教学が組織された。

このため、日蓮教学が混乱に陥ち入り、日蓮宗では本尊も確立されていない、というッシリをまぬがれざるを得なくなつたのだ。

佐々木　諸法実相鈔の中に、

「釈迦、多宝の二仏というも用の仏なり。妙法蓮華経こそ本仏にてはおわし候え」

「凡夫は体の三身にして本仏、仏は用の三身にして迹仏なり。然れ

ば釈迦仏は、我等衆生のためには主、師、親の三徳を備え給うと思いしに、さにては候わず。返つて仏に三徳を被ぶらせ奉るは凡夫なり」

といつたような考えは、明かに「凡夫の外に仏はない。凡夫こそ実際の仏だ」

という真言思想と類を同じくしている。

もちろん諸法実相鈔の全文が、偽作されたものというのではない然し、諸法実相鈔のように、一篇の著述や御消息文の中にも、こうした偽作思想が混入したまゝ、篇寡された御遺文は少くない。

四百余篇という御遺文全体となれば、相当数の偽作思想が混入しているといえよう。

石川　何時ごろから、そんな偽作遺文が作り始められたのだろうか

木村　大体、応仁の乱から桃山時代にかけて始まつたのではないかと推量されている。

川島　ともかく大へんなことだ。真の日蓮教学を確立するには、御遺文集の再編纂から始めなければならない。

和田　それと同時に、現在の日蓮教学の中から、まず真言思想をしめ出してしまわねばならない。

近藤　法華経の事の法門と、真言の事の法門との対決だ。

木村　対決の頂点は、両者の本尊観にある。法華経の本仏と、真言の大日法身の解釈の仕方に、問題点がしぼられる。

佐々木　日蓮宗の中でも、法華経の久遠の本仏を、真言の大日法身と同じように考えている傾向が多い。

小林　真言思想は、独り日蓮宗ばかりでなく、あらゆる宗教に喰い入つている。

キリスト教でさえも、その超在的一神を、内観的に見ようとすれば、真言と同じ思想に堕ち入り勝だ。一般哲学界にも、これと同じ傾向がある。

従つて真言破折は、内外ともに重大な意義をもつて来る。我々は慎重に、ことを進めねばならぬ。

〈以下次号〉

日蓮聖人の懺悔滅罪観（その二）

與同罪と謗法呵責

象白高日　当担説解

8

日蓮大聖人の懺悔滅罪観を述べるに当つて、忘れてならないことは、與同罪と謗法呵責ということです。

大聖人みずからの懺悔滅罪信仰については、既に正月号でふれておりましたので、今度は与同罪と謗法呵責について述べてみることにいたしましょう。

与同罪というのは、人の謗法にくみするという罪です。謗法にくみするということ、それは人の謗法に同調したり、これを手伝つたりすることは勿論、人の謗法を見て見知らぬふりをしたり、見逃してしまつたり、或は法華経をそしらなくても、法華経以外の信仰をしたり、或は信仰ということには一切無関心でいる人々を、いましめないということさえもふくまれているのです。

謗法を呵責するという、この厳正さは、大聖人の懺悔滅罪観上、みのがすことの出来ない重大なことでした。

自分の面前で、親の悪口を言われているのを、だまつている子が何処におりましようか。

親をないがしろにしている子をいましめない兄弟が何処におりましよう。

本仏釈尊は一切衆生の親です。法華経はその血肉です。本仏釈尊を、そして、その法華経を、或はないがしろにしたり、そしつたり

している人々を見て、これをいましめない者は、法華経の信仰者とは申せません。

たとえ形の上では、如何に法華経を信じているようではあつても少くとも法華経の尊さを知らない者、法華経の恩を知らない者、と言わざるを得ないでしよう。

主・師・親の三徳をそなえられた本仏釈尊の恩、そして法華経の尊さを味わえば味わうほど、いまだその尊さを知らないでいる人々に対しては、これを知らしめ、法華経をそしる人々に対しては、敢て面をおかしても、いさめざるを得なくなつて来るものです。

ましてや、自分みずから過去および過去世においておかした誇法の罪、乃至いまだ法華経を信仰するに至らなかつた頃の自分自身の誇法を懺悔すればするほど、誇法の人々の姿にこそ、曽つて、自分自身の誇法の姿を見、自己懺悔の心の底から、人々の誇法をいましめずにはおられなくなるのが至情でありましよう。

世間一般でも、自分の犯した罪を心から懺悔する人は、人々に対してゞも、自分と同じ罪を犯させまいとするものです。

日蓮大聖人は、みずから犯した過去の誇法を懺悔すればするほど人々の誇法を、そして国家の誇法までも厳正に呵責され、また他を呵責すればするほど。みずからの懺悔に徹して行かれたのでした。

9

文水十一年九月二十六日、身延山中より鎌倉の檀越四条金吾に与えられた大聖人のお手紙に、

「主君の耳に、この法門を入れて与同罪まぬがるゝこと」

というのがありますが、それは四条金吾が主君江馬光時の極楽寺良観に帰依している誇法を諫言し却つて主君の逆鱗にふれ、あだまれるようになつてしまつたことに対する、大聖人の教えを述べたものでした。その中に、

「心は日蓮に同意なれども、身は別なれば、与同罪のがれがたきの御事に候。主君に此の法門を耳にふれさせ、進ぜけるこそ有難く候

え。

今は御用いなくもあれ、殿の御失（とが）は脱れ給いぬ。これより後には、口をつゝみておわすべし。また天も一定、殿をば守らせ給うらん」

と仰せられていますが、この中に「心は日蓮に同意なれども、身は別なれば、与同罪のがれがたき御事に候……」と申された此の一句こそ、日蓮門下の者として、深く心に留め、反省しなければならないことではないでしょうか。

大聖人の忍難慈勝をたゝえることはあつても、大聖人と心を同じくし、身も同体となつて、誘法の人々を幾度いさめたことがあつたでしょう。

法華経に対して無関心でいる人人や、法華経以外の他の宗教を信じている人々、或は法華経をそしつている人々、或は法華経を信じているようではあつても、却つて本仏釈尊をないがしろにしている人々は、ちまたに満ちあふれています。隣近所に、そして自分の家族の中にも、親族の中にもいるはずです。

そうした人々に対して、いかなる心をもつて、どれほどの深い心をもつて、何度いさめたことがあつたでしょう。

それらの人々の誘法をいさめずしては、まこと自分自身の誘法懺悔もなければ、罪障の消滅も成就しないのです。

大聖人は開目鈔で申されました

「鉄をきたうるに、いとうきたわざれば、きずかくれてみえず。度々せむれば、きずあらわる。麻の実をしぼるに、つよくせめざれば油少きが如し。

今、日蓮、強盛に国土の誘法をせむれば、この大難の来るは、過去の重罪の、今生の護法に招き出せるなるべし。

鉄は火にあわざれば黒し。火とあいぬれば赤し。木をもつて急流をかけば、波山の如し。ねむれる獅子に手をつくれば大いに吼ゆ」

〈完〉

仏語解釈

煩悩即菩提

「煩悩即菩提・ボンノウソクボダイ」ということは、仏教徒の間では、よく聞かされる言葉です。

然し一体、どういう境地を指して言うのでしょう。通常これは、大へんむづかしいものだとされて来ました。

仏教教学の奥儀をきわめ、厳しい苦修練行に堪えて、始めて選ばれた、わずかな人々にしか到達することの出来ない境地、それは一般の人々では、一生かゝつても計り知ることさえ出来ないものだとされて来ました。

然し、実はそうではないのです一文不知の、如何に愚かな者でもお題目を唱えさえすれば、容易に到達出来るものなのです。

煩悩とは凡夫の心。菩提とは仏陀の心。仏陀の心とは、妙法蓮華経のお題目のほかはありません。そこで、このお題目を唱える時、仏陀の菩提の光りが、凡夫の煩悩の闇みを照します。

仏陀は父、凡夫は子。父は父の功徳をもつて子をいつくしみ、子もまた父の功徳をたゝえて父を慕う、この父子一体の境地をさして煩悩即菩提というのです。

これまでの仏教では、煩悩錆錆した凡夫の心の中に、みずからの菩提の心を見出し、菩提の心を磨きあげようとして、無量深重なる煩悩と戦つて来ました。

従つて煩悩即菩提という境地が、一般の人々では到底到達することも出来ない、遙か彼方にあるかのように思われて来たのです。

菩提の境地、それは既に無始久遠の昔、本仏釈尊によつて完成され、お題目の光りとして、尽未来際、十方無辺のすべての人々にそそがれていたのです。

私たちは、如何に智慧は愚かであつても罪は深くても、このお題目を信受しさえすれば、その身そのまゝ、即座に父子一体、煩悩即菩提の境地に入れるのです。

この信を時々念々にたもつことを行というのですが、これを唱導れさたのが、日蓮大聖人であつたのでした。

祖訓

行学の二道をはげみ候べし

行学たえなば仏法あるべからず

我もいたし人をも教化候へ

行学は信心よりおこるべく候

力あらば一文一句なりとも

かたらせ給ふべし

諸法実相鈔

新設欄　仏語解釈について

先月号でもお知らせいたしました如く、本誌では別刷りで鷲峰教箋を折込みで配布いたしてまいりましたが、当分それを中止いたしまして、これに替るものとして本月号より、難解な仏教用語の解釈欄をもうけることにいたしました。

つきましては「読者の声」や官製ハガキなどにて、おたずねしたい仏教用語をお知らせ下さい。順次掲載し御解説申し上げます。

またこれにあわせて、広く皆様からの御原稿を募集いたしますとともに、本誌に対する読後所感、御意見御希望なども、おきかせ下さいますようお願いいたします。

読者の皆様と共に本誌を、よりよき信仰雑誌として育てゝ行きたいと思います。御協力のほど切にお願いいたします。

編集部

身延山青年行学講習会案内

身延山布教部主催の第七回身延山青年行学講習会は次のように実施されることゝなりました。

一、時　三月二十六日（金）より二十九日（月）まで三泊四日間

一、所　身延山西谷、信行道場

一、講題と講師

日蓮聖人の御生涯　身延山布教部長　岩間湛良師

日蓮聖人とその教学　東京身延別院住職　藤井教雄師

身延山の日蓮聖人　身延山教務部長　長谷川寛慶師

日蓮聖人の上行自覚と懺悔滅罪観　身延山大学教校　疋田英発師

唱題の意義と実践　身延山布教部　日高白象師

創価学会の実態と今後の動向　新興宗教対策委員　石川泰道師

一、会費　一人二千円（宿泊代）米一升（代金の場合一七五円）記念写真代百円

一、定員　七十名（申込順）

一、携行品　お経要品、筆記具、二十八日の奥之院徒歩登詣用ハキモノ

一、申込方法　官製ハガキに住所、氏名、年令、性別職業、所属寺院名を明記の上、身延山布教部あて

一、集合　三月二十八日午前十一時より十二時まで、信行道場講堂にて（各自中食をすませて集合のこと）

一、解散　二十九日午後二時、

身延山布教部

昭和四十年度

鷲峰賛助会員紹介

本誌発展のため温く御指導、御支援下さいます読者皆様に厚く御礼申上げます。

特に御志納、御支援下さいました鷲峰賛助会員の方々には、こゝに御芳名を御紹介申上げ、謹んで衷心より感謝の意を表させて頂きます。

賛助会員御芳名

東京都　秋元　唐吉　　龍野市　花房　千代
〃　中原　勝　　岐阜市　花房　毅
〃　中山　はる　　奈良県　藤本　晃良
〃　松谷　ゆみ　　〃　榎本　蓮子
〃　中田　穆彦　　安城市　松谷　英生
〃　日高江里子　　西宮市　長宗　良子
秋田県　分銅　志静　　富士宮　清　周代
身延町　日高　白象　　神戸市　奥町　妙代

〈前承一月三十日現在
敬称略・順序不同〉

なお、初めての賛助会御加入者には賛助記念としてインド王舎城仏舎利塔本尊として渡印いたしました、身延山金銅の釈尊像記念写真、（本誌表紙の写真四つ切り大）一葉を贈り申上げております。

発送部

本誌の発行所身延へ還る

昨年の夏、本誌発行事務所を身延山久遠寺内より甲府市の妙本寺へ移転いたしましたが、本年二月号よりタイプ印刷から活版印刷にするため、印刷所を甲府より身延町梅平の藤田印刷所へ変更しましたゝめ、これにともない発行も身延へ還し、波木井山麓にある本妙庵世話人遠藤喜男さま方といたしました。

従来、本妙庵への郵便物は一切、遠藤さま方に集収されていますので、鷲峰関係のすべての郵便物もこゝに集められ、本妙庵へ運ばれます。これによつて今までのような事務の停滞は、今後一切なくなりました。今後の新発行所は左の通りです。

山梨県身延町波木井三区四一二五番地

鷲　峰　会

編集後記

★本誌創刊いたしましてからはや二ケ年の歳月を経過いたしました。創刊当初ガリバン印刷でありましたがさらに一歩前進しタイプ印刷となり、本月号よりいよいよ活版印刷に踏み切る事になりました。これも偏に賛助会員並びに愛読者皆々様の御援助のたまものと編集部一同深く感謝いたしております。

★これによつて本誌も一段と体裁も整つてまいりましたので、今後編集内容も、より一層充実したものへと決意し、さらに発展いたしますことを願つております愛読者皆様におかれても、なお一層の御指導と御期待を伏して乞う次第であります。

★本月号の編集会議が終りますと、日高編集長が筆をおくまなく、福岡県宗務所・青年会主催の街頭布教に参加いたしましたので、本月号の発行並びに皆様から寄せられました一般通信の御返事が遅延いたしました事を、誌上をかりて深くお詫び申し上げます。

鷲峰——二月号

昭和四十年　第三巻　第二号
通巻　第二十号

定価　五十円　送料　十円

昭和四十年一月二十日　印刷
昭和四十年二月一日　発行

編集兼発行人
山梨県身延町波木井　醒悟園本妙庵
日高白象

印刷所　山梨県南巨摩郡身延町梅平
藤田印刷所

発行事務所
山梨県身延町波木井三区四一二五
鷲峰会
振替（甲府）二〇九三番

誌代　半年分　三〇〇円　送料　六〇円
一年分　六〇〇円　送料一二〇円
賛助会費　一年分　三〇〇〇円（分納可）